
デレ 5 % !

marina.m

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デレ5%！

【Nコード】

N8126P

【作者名】

marina・m

【あらすじ】

駅で会った小さなツンデレ（デレ5%）の女の子。

その子と主人公の物語。

文章がヘタクソ？ですが、どうかよろしく願います。

第1章 はじまり

春休み。

俺はいつも通り帰宅途中だった。

今日も友達と夜まで遊びつくした。

といってもまだ22時30分だが。

駅の中を通り、駅を出たらそこから徒歩5分で家につく。

学校や遊ぶ場所はほとんど俺の家から駅をはさんで向こう側にある。だから毎日のようにこの駅を通っていた。

しかし、今日だけは様子が違った。

駅構内に不良のような悪そうな奴らがたむろっている。

ここまではよくあることかもしれない。

しかしその中に一人の女の子がいる。

その女の子は身長150センチくらいで髪はショート、かなり明るい色だった。

遠くから見た感じではかわいらしい女の子である。

確実にその女の子はからまれている。

だから俺はその子を助けに行った。

「あゝ、あのだなあ、その、女の子を大勢で取り囲むのは何とも卑怯というか可哀想というかそのだなー、その子も嫌がってることだしなー、」

女の子を格む連中は7人。

「あん？何だデメエ。この子は俺たちのものだ。文句あるか」

俺が不良を相手にできるのはせいぜい3人。
よし、逃げよう。

俺は女の子の腕をつかむと一気にダッシュした。

「きゃっ！」

女の子の可愛い悲鳴。

しかしスピードは落とさない。

が、あまりの勢いにその女の子はこけた。
そう、盛大にこけてしまったのだ。

（あ、死んだ）

一瞬でそう思ったが、こうなってはケンカだ。
戦うしかない。

俺はまず一番近くにいたグループに入りきれていないしょぼそうな
奴に肩パンをした。

ほんとに弱かったらしく、一瞬でK.O.

すぐに二人目、ロン毛の大男の顔を殴る。

後ろから殴られたが、そこまでの威力はなくなんとか耐える。

そしてすぐさま3人目の腹を殴り、後ろにいる4人目に蹴りを入れ
る。

5人目は股間をけり、殴りかかってきた6人目をかわし、最後の1
人の顔面にパンチ、かわした奴にも蹴りを入れてひと段落。

まだ戦意のある残り3人もパンチ、キック、投げ技であっさり全滅。
見かけほど強くもなかったらしい。

そこまでケンカの強くない俺でも倒せた。

駅の不良どもを退治したところで俺はさっきの女の子のもとへ近づいた。
するとその女の子は泣いていた。

「こわかっただろうけど、もう大丈夫」

と声をかけたところで、

（あれ、なんかおかしい、この子、怒ってないか？）

涙目で俺をにらんでくる。

なんか殺意のようなものがひしひしと伝わってくる気がしなくもないが…

と、

「うぎゃああ！！！！」

殴られた。

小さい身長からのアッパー。

俺は一瞬でダウンだった。

というか、その威力があつたらさっきの連中くらいなら倒せた気がする。

「な、なんで？」

「あんた、あたしを転ばせたでしょ！覚えてないの？ たった5分前のことを覚えてないなんてネコ以下の記憶力ね」

思いっきり罵倒された。

あ、俺はMじゃないんで。

うれしくありません。

「それは…、まあ確かに転ばせてしまったのは謝るけど……」

なにか感謝の言葉とかはないのか？

一応さっきの戦いで少ないもののいくつかをしてるんだ。

「なに、あたしに感謝しろとでもいいたいの？ ふん、そんなの一切ないわ、だいたいあんな連中あたし一人で充分だったのに」

なんて失礼な。

人がせつかく助けてやったのに。

今、ようやく女の子をゆつくり見ることができた。

顔はすべてが整っていて、背は小さく痩せている。

かわいらしい、という印象と綺麗、という印象が見事に混ざり合った子だ。

きつと歳は16、7くらいで俺と同じくらいだろう。

ただ、少し性格がきついらしい。

「あつそ。まあ、余計なお世話だったな。あ、この先にまださっきの連中いるかもだから気をつけろよ。それじゃな」

俺は片手をあげ歩いていく。

ここまで言われてまだかかわる必要性もない。

「ちょ、ちよっと！ 待ちなさいよ！」

「なんだよ」

「いやその、さっき、からまれてたばかりの女の子を助けておきながら、いや別に助けてもらったとか思ってるわけではないけどー、それを放っておく気？ まだ危ないかもって言ってるくせに？」

無茶苦茶なことを言う。

「さっき一人で充分って言うてたのは誰だよ！」

「うう…、そうだけどさ…」

きつとこいつは怖いんだろう。

ほんとは怖くてたまらないのだが、強がっているのだろう。

そう思うと俺は放っておけなかった。

それにまあまあ可愛いじゃないか。

「よし、駅出るまでついててやるよ」

「べ、別に一緒に来いって言うてるわけじゃないけどまあ、来たい

って言うなら来てもいいわ」

まったく素直じゃない奴だ。

でも俺はそこまで不快に感じなかった。

駅を出るとき、案の定さっきのやつらがいたが俺を見たたん全員逃げだした。

「あんたって意外と強いね。そんなに弱そうに見えるのに。あんたみたいな見かけ倒しもなかなかないわ」

「あ？別に強いわけじゃないさ。だいたいケンカだってしたことほばないし、あいつらが弱かったただけだろう」

実際そうだろう。

俺たちは結局駅を出てからも流れで歩いていた。どうやら家がこの辺らしい。

「へえ、意外とあんた、謙虚なのね」

「そういうわけじゃないさ。それで、お前の家はどこなんだ？」

気になっていたことだ。

もう俺の家もすぐそこであり、こいつも近いなら家まで送ろうとしたのだが、

「ん、うん」

と彼女は一軒の大きなアパートを指さす。

ん、ここは、、

そう、俺の家のまん前だった。

しかも高級感の溢れるアパートだ。

一軒家に住む俺も絶対こっちのアパートの方がいいと思う。

「な、なんで？ 俺、お前のこと見たことないぞ？」

ここに住んでいたのなら中学校が同じはずだ。

「だってこの春越してきたんだもん。 この近くの高校に通うことになったからね」

この近くの高校……

ここから線路を挟んで駅を通った向こう側にある高校、はるみ春陽高校……

「春陽高校って聞いたことあるか？」

「ん、その学校」

やっぱり、、

こいつが次から通う学校というのは俺と同じ春陽高校だった。

「で、お前は何年生なんだ？」

「次から2年」

「だよなあ……」

同じだ。

そんな気がした。

そして俺の高校生活はこいつによって完全にかわることになる。

駅

ピンポン

家のチャイムが鳴る。
今日は始業式の日だ。

学校へ行く準備をすべて済ました俺はあとは家を出て、いつもの駅を通って、学校へ登校するだけだ。

しかし、俺と一緒に学校へ行くような友達はいない。
ではなぜチャイムが鳴ったのだろう。

朝からなんかの勧誘か？
それならお断りだ。

俺はスクールバッグを持って玄関へ向かう。
今日はいい天気だ。

ドアを開け、セールスお断り！
と追いだそうとしたが、

「遅い。 遅すぎる！ チャイムを鳴らしてから3秒以内に出なさいよ！」

ドアの先に立っていたのは美少女、もとい昨日駅で会った女の子だった。

今日はうちの学校の制服を着ている。

きっとこれから登校だろう。
しかしなぜうちに？

「学校の場所も分らないのか？」

「わ、わかるけどその…。 わからない。 やっぱわからない。
そう、わからないのよ。 だから、その案内してほしいなあって」

どっちなんだよ。

わからないことなんてあるか？

だいたい駅を通ったらすぐそこに学校見えるじゃねえか！
なのにわからないって、

「……………ひょつとして、あの駅がこわいのか？」

……………。
沈黙。

「わかった、行ってやろう」

「べ、べ、別に、こわいっていうわけじゃないんだけど、そのわかんないからさあ、案内してほしいだけよ」

「わかったわかった。 でもこんな朝っぱらから昨日みたいな連中
がいるわけ……………」

朝の8時前だぞ、こんな時間に駅にたむろったってしょばいぞ、おい。

「だからちがつてば!！」

「こぶ!!!!!!!」

殴られた。

くくくく

駅。

もちろん何もなし。

普通に通りすぎた。

駅を出たらすぐ学校が見える。

「ほら、あれが学校だ。簡単だろ?」

「え、ええ、簡単だわー、でも明日には忘れてるかもおー」

「たく、こわいならこわいって言え!!」

「……まさか、明日も家に来るんじゃないだろうな……」

「さあ、わかんなくなったら行くかもね」

やめてくれ。

いや、別に美少女と登校することはいいことだが、まわりの男子連中から殺意を持った目で見られている。

(おい、あそこのリア充、どうにかならないのか?)

(あんな美少女と歩きやがって、後で学校で見かけたら殺してやる)

こんな目つきだ。

いや、実際そう言っているのかはわからないが。

まあこんな感じで俺たちは学校についた。
まず、クラス編成の張り出しを見に行く。

「えーと、俺はつと、おお、3組か。他には、」

同じクラスに1年からの中のいい友達がいた。

「なんか、この風斬かざきりれいら麗羅れいらっていう名前、すごいな」

「……それ、あたし」

なにいい？

「じゃあ、おれとおなじくらす？」

おなじくらすなのか、ここまでぐうぜんがかさなるのか、うわぁーん

「へえ、あんたの名前、久遠っていうんだ。あんたのそのツラには似合わないまあまあマシな名前ね」

佐山さやまくあん 久遠

これが俺の名前だ。

なんで俺の名前を？

ふしぎそうな顔をしている俺に気付いた彼女が答えた。

「だってあんたの家の表札見たし。それもわかんないってあんた
ってバカ？」

「バカって何だ？ 真ん中くらいだぞ！ お前と変わらないと思う
！……！」

「何言ってるの？ このあたしがあんたに頭脳で負けるとでも？」

この偏差値74のあたしに？」

「参りました」

即答。

「それで、あなたは偏差値いくつなの？」

「う、49です」

「四捨五入しても50じゃない。あたしは四捨五入して100だからあなたの2倍ね」

「ちょーっと待てえー！ お前今なにをした！ 俺は1の位を四捨五入したが自分のだけ10の位の四捨五入をしなかったか？ しかもこの件どっかで見たことあるぞ？」

「うるさいわね、ホツチキスであんたの口の中……」

「だめだあー、それ以上言うな、訴えられる。てか、お前『化。語』好きだろ、絶対」

「なにを言ってるのかしら、まったくわからないわ」

そんなこんなで教室。

この毒舌美少女と教室へはいると、一気に目線が俺へ。

そして一瞬で隣の美少女へ。

そして怪しい目つきで俺へと戻り、美少女に向く。

「お、おはよう」

クラスは変わったが、1年の時に顔を見合わせていたり話したことのある奴もいる。

その中の一人が急に俺のところへすっ飛んでくる。

「ちょっと、その子何？ いったいどこで拾ったの？ なんで一緒なのよ！ 見たことないぞ、編入生？ もしかしてどっかの迷。猫？？」

あいつといい、お前はスーパー。ツシュ文庫にうったえられんぞ。

「編入生だ。俺んちの前に住んでてなあ、」

「なぬうつ！ それはどんなフラグだよ！ 完全にフラグ立てただろ、お前」

「ギャルゲのやりすぎだ。 だいたい殴られてばかりだ」

「おおー、いいねいいね。 もしかしてツンデレちゃん？ やっぱり迷。猫系の？ 名前は霧。……」

「だからそれ以上言っな！！」

ちなみに、俺はライトノベルを少し読みます。

てか霧。さんはツンデレじゃないです。

ホームルーム
そしてHR。

担任が教室に入ってくる。

20歳後半くらいのまあまあ若い女の先生、しかもまあまあ綺麗だった。

「おおー、」

クラスで起こる歓声（男のみ）。

「はい、では、これからホームルームを始めます！」

……。

かんだ、かんだよな、今？

クラスがそんな感じでどよめいたが、

「はい、今日は始業式です！ 皆さんはりきって行きましょう！」

押し切った。

はあ。

やっと始業式が終わった。

始業式といっても、校長（はげ、めがね、スケベ）の長々とした話を延々と受け流すだけの儀式。いつたいこんなことをして何の意味になるのだろうか。

時代はエコ、そう、ecoだ。時間も節約すれ。

と校長に対する

文句を心の中で呟いていると、

「ちょっと、もう帰るわよ」

声をかけられた。

このかわいらしい、高く透き通った声は、

「はあ、お前か。　まだ夕方だろ？　一人でも大丈夫だろうが」

「無理無理無理ー！　てかこのかわいい女の子が襲われてもいいっての？　いいの？」

「ああ。　いい」

だいたい、お前ならあの連中くらい戦えるだろ。
現に俺は2回も殴られて倒れてるわけだし。

「無理なのー！　いいからきなさいー！」

「帰り本屋に寄りたいんだ、だから今日は……」

「行く」

「本屋に？」

こくり、とうなづく彼女。

「はあ……」

駅前の本屋、

「あんた、そんな本読むの？」

俺が手に取った本は『アホと試験と召喚獣』という本。

表紙がちょっと怪しいというかいやらしい。

「おまえ、この本舐めるなよ！！」面白いんだから」

「知らないわよ、そんなの。いいから、早くして」

ちよつとまで、まだ見たい本が……

「もう、はやくしてよね！！ あらうー、ごめんなさいねー、あたしのせいでエロ本買えないのかー」

エロ本は買うつもりありません。

いまは情報社会です。

そしてすべての用を済まし、俺たちは本屋を出た。

あたりはすっかりあかね色に染まり、夕方も終わりに近づいていた。そしていつものように駅の階段を上り、階段を下る。

何事もなく俺たちは駅を通りいつも通りの帰路に就く。

「でも、どうしてお前はそんなに駅を怖がるんだ？ 確かに一回からまれてしまったらそのあとはこわく感じるのはわかるが、朝や夕方まで……」

「仕方ない、あんたにだけ話すわ」

おもむろに彼女は語りだした。

「あたしのパパがね……、」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8126p/>

デレ5%！

2011年1月3日22時49分発行